

## ファミリー・アンド・ヒストリー

## 〔第1回〕

## はじまりはお墓参り

+ 文 岩本耕太郎 Text by Kotaro Iwamoto +

きっかけはお墓参りだった。

祖父の代からは東京暮らしをしてい  
るのだが、お墓は山梨県の上野原とい  
うところにある。相模湖の少し先で、  
中央道で渋滞することで有名な小仏ト  
ンネルの近くといった方が分かりやす  
いだろう。中央道の上野原インターを  
降りて突き当たりを右折、旧市街地へ  
向かう。

山間の狭量地に続く町並みは典型的  
な田舎の風情である。信玄餅で有名な  
桔梗屋の看板が飛び込んでくる。市街  
地から少し山に入ったところにお寺が  
あり、3畳ほどの墓地に墓石が4石並  
んでいる。一番大きな墓石は父の代に  
新しく作ったもので、残りの3石は古  
いものである。一番右端の墓石が一番  
古いらしく、明治18年に亡くなった四  
代前の先祖の墓だ。

こんなことを言っただけで先祖様に申  
し訳ないが、現代人にとってお墓参り  
は決して楽しいものではない。年に1  
〜2回世間の慣習に従って義理で訪れ  
るといふ程度のものであった。その年は  
なぜか家内がスポンジを用意し、たま  
には汚れている墓石を掃除しようと墓  
石をゴシゴシ擦ってみた。

すると今まで苔生していたので何も

読めなかったのであるが、苔の下から  
彫られていた文字が見えてきた。墓石  
の下半分には縦に「長次郎の墓」とあ  
り、墓石の横面には明治18年没、明治  
20年に息子である吉次によって建立さ  
れたとあった。吉次という名前も珍し  
いと思ったが、もっと驚いたことに名  
前の漢字の上にローマ字で横書きに名  
字が彫ってあったのだ。

この時代にローマ字を彫るってどう  
いうことなのだろうか。ローマ字自  
体は16世紀にポルトガル式のローマ字  
というのが日本にもたらされている  
が、長い鎖国の時代を経て、幕末の  
1867年に米国人ジェームス・カー  
ティス・ヘボンが和英辞書『和英語林  
集成』を著した際に使われたのがヘボ  
ン式という今では一般的なローマ字で  
ある。

明治20年は西暦だと1887年なの  
でかなりハイカラだったのであろう  
か。家内は「ローマ字だけ後から彫っ  
たんじゃないの」と言ったが、それ  
にしては縦書きの漢字の名前の上部のス  
ペースが妙に広い。最初から彫られた  
ものであることは明白だ。

そもそもローマ字と漢字を混ぜて使  
うこと自体が違和感満載である。早速  
父親にこのお墓のことを尋ねてみた。

その昔、長次郎さんがどこからとも無  
く上の原に現れて医療を行ったそう  
で、それが所以で町から名誉村民とし  
て墓を寄贈されたというのである。ど  
こから流れ着いたのかは不明である。

今のお墓は昔あったお墓が再開発で  
移築を余儀なくされ、現在のお寺の  
墓所に入れていただいたそうなのでお  
寺とは元々あまり縁がなく檀家という  
わけでもないため、  
お寺に聞いても所  
いは分からない。  
もしかして隠れ  
キリシタンかなん  
かで流れ流れてこ  
の地にたどり着い  
たのだろうか。

## profile

帝国クリニック院長

1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。

山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を  
研究、1993年より現職。

サーフィンとクラシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。  
著書に『患者さまが増える』（H&I出版）、『エグゼクティブ  
が実践するたった一つの健康法』（中経出版）

